

(5) 鉄鏃について

杉山 秀 宏

① 長頸柳葉（長三角形鏃）鏃について

(第186図)

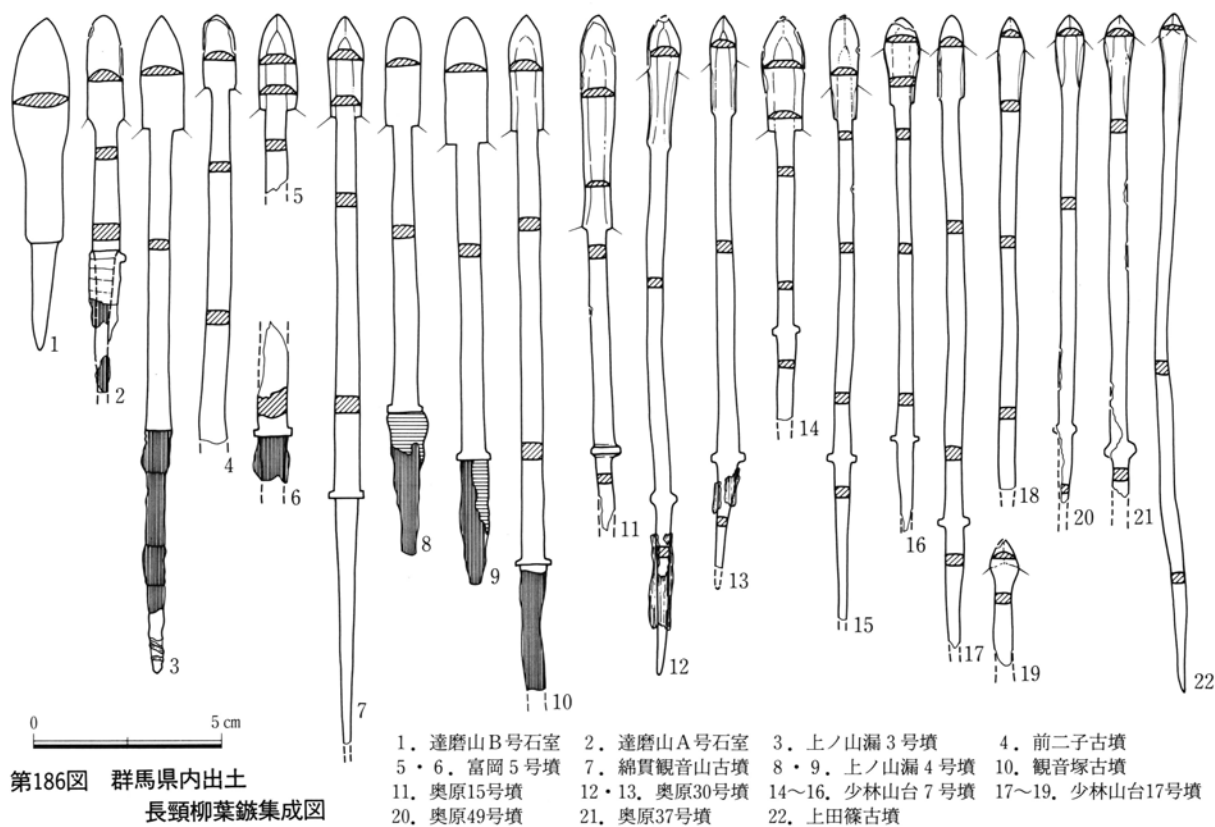
長頸柳葉鏃は、基本的には長頸長三角形鏃の中に入る鏃である。ただ、鏃身が長三角形あるいは、剣身形と異なり、鋒よりふくらを有した後、ほんの少し内湾するという柳葉鏃の特徴を持っていることから、長三角形から分けて考えられるものである。時期的には6世紀後半近くになって出てくるもので、それ以前は長三角形鏃の中でも剣身形とでも呼ぶべき直線状に刃部が垂下するものであった。この剣身形とも系統的に近いものである。

群馬県内で、この長頸柳葉鏃の変遷を追ってみたい。まず、最初は、長頸長三角形鏃の祖形タイプと考えられる達磨山古墳B号石室（赤堀町）例（第186図一1）と赤堀茶臼山古墳（赤堀町）例の2例が代表的である。達磨山古墳B号石室例は、鏃身形は、剣身形の直線状に刃部側線が垂下するもので、鏃身部は2.1~2.5cmとある程度巾広い形態を有して

又、鏃身間は斜関となる。頸部の長さはかなりバラエティがあるが、いずれも鏃身部長が頸部長を越える事はない。群馬県内の長頸鏃では初現に近いものである。これと時期的にちかいものが、赤堀茶臼山古墳例である。この次に来るのが達磨山古墳A号石室（赤堀町）例（第186図一2）である。図では、鏃身部長2.9cm、頸部長3.3cmのものをあげてあり、この段階で明らかに頸部長が鏃身部長を越えたものとなる。この類の長頸鏃の祖形タイプと呼ぶべき一群は4世紀末葉から5世紀前半までに集中して出土する。

この鏃群以降の中期後半段階長頸鏃は、群馬県内では、長三角形鏃としてはあまり良好な例をみない。鶴山古墳（太田市）例は、鏃身部の形は片方に逆刺を持つ特殊な鏃である。逆刺が無いほうの関は斜関である。鏃身部は逆刺の長さを入れなければ、3cm、頸部は7.2~8.5cmと完全な長頸化を示している長三角形鏃である。

もう一例、6世紀初頭に下る可能性もあるものとして上ノ山漏3号墳（大胡町）例（第186図一3）がある。刃部側線が直線状を呈する剣身形に入る長三



第186図 群馬県内出土
長頸柳葉鏃集成図

角形鏃で、鏃身部長3.2cm頸部長8.0cmで完全な角関である。県内で長三角鏃で確実な角関の例はこの上ノ山例が最初であろう。

この例を過ぎると6世紀前半の例として前二子古墳(前橋市)例(第186図-4)がある。鏃身部長1.8cm、頸部長9.5cmと少し鏃身部が小型の鏃である。この例に時期的に続く6世紀中頃の富岡5号墳(富岡市)例(第186図-5・6)は、鏃身部と、頸部と茎の境界部の一部が残っているものである。鏃身部は2.5cmで、確実に棘関を有しているものである。県内で棘関の初現に位置するものである。

この次の段階に比定できるのが、綿貫観音山古墳(高崎市)例(第186図-7)である。鏃身部長が2.3~3.3cmをはかり、一番多いのが鏃身部長2.6~2.7cmの長さで、頸部長も9.5~10.0cmが一番多い。全体の造りはしっかりとしており、重厚で、他の古墳出土の例よりもやや重い。また、鏃身部の造りが、鋒よりふくらを有した後、内湾する柳葉状を呈しており、この例としては、県内で初現となる。この時期とほぼ同じ例が上ノ山漏4号墳(大胡町)例(第186図-8・9)である。鏃身部長3.2cm、頸部長8.4cmで頭部はほんの少し柳葉状を呈している。重さをほぼ同じ法量の観音山例と比較すると軽い。古墳の被葬者のクラスに応じて鏃も差別化をはかっているものと考えたい。

この観音山例等につながるのが観音塚古墳(高崎市)例(第186図-10)である。柳葉形を呈する頭部で長さは、3.0cm、頸部長は11.2cmと頭部、頸部ともかなり長大であるが、この時期の大型墳に副葬された柳葉鏃の例としてあげられる。というのもこの観音塚古墳も観音山古墳同様100mクラスの前方後円墳の為、他の中小墳の鏃との差別化をはかった可能性があるのである。事実、6世紀末に比定される鏃はこのような長大な鏃がほとんど出土していない。この観音塚古墳と同時期から7世紀代にかけての鏃の変遷をよく伺えるのが奥原古墳群(榛名町)例と少林山台古墳群(吉井町)例である。

観音塚古墳の次あたりに比定できるのが少林山台

7号墳例で、頭部のうち、刃部が柳葉の全体にあるもの(第186図-14)と、中央より上にのみ刃部があるもの(第186図-15・16)の二つがある。頸部長は刃部が全体にあるものが5.5cmで、刃部が途中までしかないものが8.2~9.0cmと長めである。少林山台17号墳例(第186図-17~19)は、すべて刃部は中央部より上までとなる。頸部が全体に縮小化し、刃部が先端部にのみ集約されるものもでてくる。(第186図-19)

奥原古墳群では更にはっきりとした様相があり、奥原15号墳例(第186図-11)・25号墳などは頭部すべてに刃部があるが、30号墳例(第186図-12・13)・49号墳例(第186図-20)などは、頭部の中央より上にのみ刃部を設けており、37号墳例(第186図-21)にいたると柳葉状の外形から頭部の先端のみに刃部を設ける鑿箭状のつくりへと変化している様子がみてとれるのである。上田篠古墳(富岡市)例(第186図-22)も同様である。それぞれの時期を、6世紀末~7世紀初頭、7世紀前半~中頃、7世紀後半としておきたい。このように刃部が上に集約化していく中で、長頸柳葉鏃は長頸鑿箭鏃へと変化していくと考えられる。

② 長頸片刃鏃について(第187図)

長頸片刃鏃のうち、逆刺を持つ、有腸扶片刃鏃は今のところ県内にその例をほとんど知らない。逆刺の無い片刃鏃も含めて県内の中での長頸片刃鏃についての位置づけを行いたい。

長頸片刃鏃の初現は、5世紀前半の赤堀茶臼山古墳(赤堀町)例(第187図-1)がある。鏃身部長4.4~5.0cmで、頸部長が2~3cmと、頸部より鏃身部のほうが長い鏃である。長頸系の片刃ではないが、参考として5世紀中頃の鶴山古墳(太田市)例(第187図-2)は2段逆刺の片刃鏃として重要である。長頸系は上ノ山漏3号墳(大胡町)例(第187図-3・4)が中期後半の例としてあげられる。鏃身部長2.6~2.8cmで、頸部長7.4~9.4cmの大型のものである。これ以降の例としては、6世紀中頃の例として富岡5号墳の例をあげたいが、残りが悪く、はっき

りと有腸挟片刃鏃といえるかどうか今ひとつ疑問の残るものである。

角関で、明瞭な逆刺を持つ片刃鏃の例としては、赤堀村16号墳例(第187図—5・6)があり、重要である。

棘関を有し、しかも逆刺のある鏃としては今のところ群馬では綿貫観音山古墳例(第187図—7)が唯一であろう。刃部は3.8~4.0cmで、少し内湾ぎみで逆刺端に向かってほんの少し外反する形で、逆刺の深さは0.5cmと浅い。また頸部は、8.0~8.4cmある。

この観音山の鏃とほぼ同時期の鏃が上ノ山漏4号墳(大胡町)例(第187図—8)の鏃である。鏃身部長3.6cm、頸部長8.2cmの逆刺を持たない片刃鏃で棘関を持っている。この類が6世紀後半を代表するものであろう。この後、片刃鏃は、関が不明瞭化するとともに、長頸柳葉鏃と同じように、刃部が先端部へ集約していくようになる。

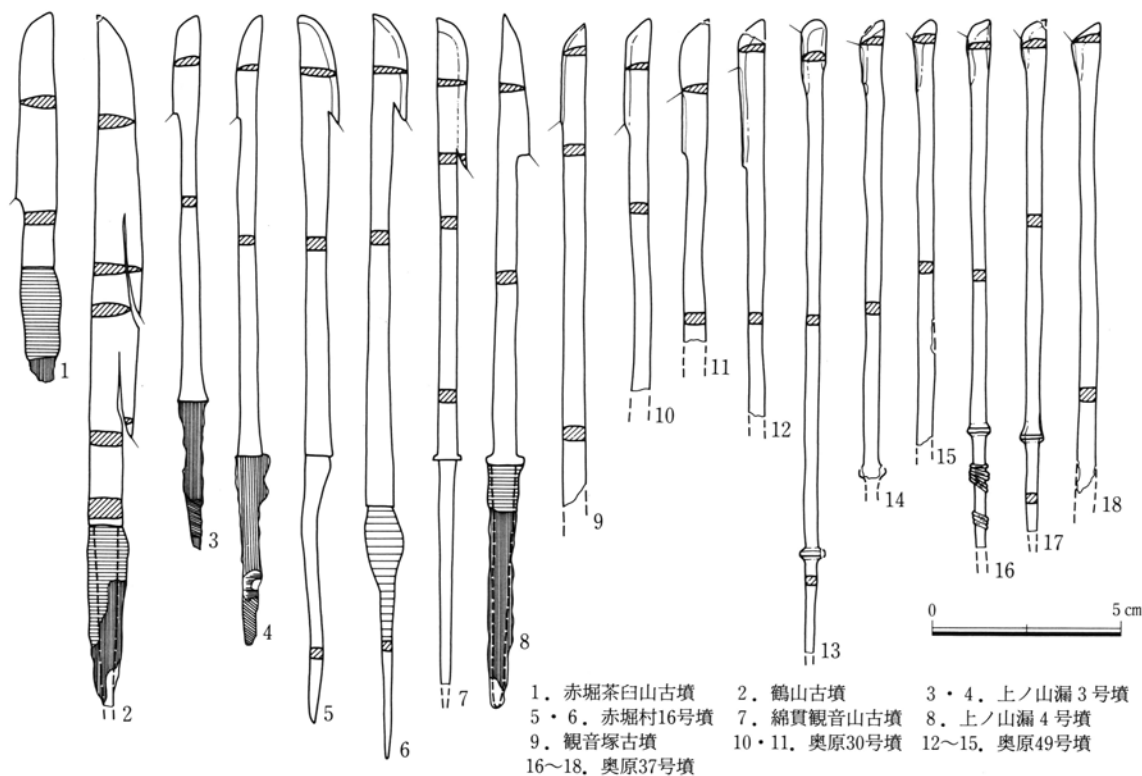
関部が不明瞭化するものに、観音塚古墳(高崎市)例(第187図—9)がある。図であげたもののように刃部の長さが2.6cmの長いものと1.5cmほどの短いもの

のがあり、いずれも、関が不明瞭で撫関状を呈する。なお、刃部は片側から打ちたたいて造っている。

刃部が先端部へ集約していく過程は、奥原古墳群出土の鏃群により明瞭に知ることができる。

奥原15号墳(榛名町)例は、棘関で刃は鏃身部全体にあるものである。奥原30号墳例(第187図—10・11)は棘関を持ち、刃が鏃身部全体にあるものと、途中でとぎれているものとの2者が混在している。奥原49号墳例(第187図—12~15)は鏃身関はあるが、刃は頭部端まで届くものが無く、途中で刃がとぎれるタイプもののみである。さらに、時期的に下る例として奥原37号墳例(第187図—16~18)で関部が不明瞭になり、鏃先端にのみ刃がつく形態となっている。

県外例も含めて、長頸有腸挟片刃鏃の状況をみると、頸部の短いものでは堂山古墳例(静岡)が参考になる。また、中小田古墳例(長野)や一時坂古墳例(長野)などが、中期後半の深い逆刺と台形関を有するものとしての代表としてあげておきたい。その後、5世紀末から6世紀初頭にかけて、東間部多1号墳例(千葉)や山王山古墳例(千葉)などがそ



第187図 群馬県内出土長頸片刃・腸挟片刃鏃集成図

の代表例としてあげられるものである。そして、これらの鍬群の次に逆刺が浅くなり、さらに棘関を持つ観音山古墳例が位置づけられることになる。おそらく観音山古墳例は逆刺を持つ長頸片刃系の最後の段階のものと考えられる。

③ 有頸腸袂長三角形・柳葉鍬について (第188図)

有頸の腸袂長三角形・柳葉鍬は、県内ではほとんど類例が無い状況である。そこで、広根系ということで、腸袂三角形・柳葉形などを含めた系列をたどってみる。

観音山古墳に先行する腸袂柳葉は、中期の達磨山古墳B号石室(赤堀町)例(第188図-1)のものがあのみである。しかし、この手の鍬は観音山例の三角形から系統の終える柳葉系とは別系統となる純粋な柳葉形の鍬群のうちの逆刺を持つ一群に含まれる鍬なので、とりあえず系統からはずしておく。

観音山古墳例の直前に位置づけられるのが、中ノ峯古墳(子持村)例(第188図-2・3)である。有頸の長三角形であるが、鍬身関が棘関であり、広根系の棘関の初現としてよいだろう。この次に続くのが綿貫観音山古墳例(第188図-4)で鍬身長4.8cm、逆刺巾2.8cmの大型の逆刺を有する鍬で、頸部と茎の境が不明瞭で棘ももちろん無い。

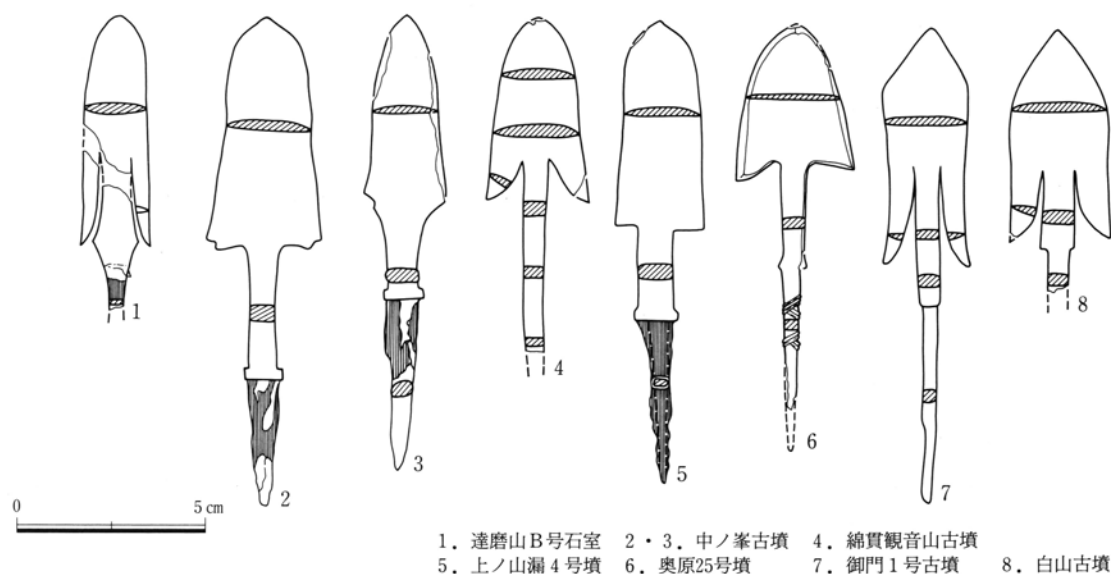
同様の時期の例として、上ノ山漏4号墳(大胡町)例(第188図-5)があり、これは長三角形鍬である。これも棘関を持っている。これより時期が下り7世紀代に入ると、逆刺がやや浅い一群の鍬が盛行する。いずれも棘関を有する。長三角形の奥原25号墳(榛名町)例(第188図-6)や三角形の奥原30号墳例などがある。この後に続くのはまた、逆刺が深くなるもので、御門1号古墳(昭和村)例(第188図-7)や8世紀代に比定される白山古墳(宮城村)例(第188図-8)などはその代表例である。なお、棘関はこの時点で消滅する。

この、腸袂柳葉鍬を県外例も含めて検討してみると、新沢510号墳、321号墳例(奈良)などが腸袂長三角形の大形のものとして初現にあたる。石光山50号墳例(奈良)が6世紀代前半頃の鍬としてあがる。6世紀中頃～後半にかけての観音山古墳と近い時期の良好な例として城山1号墳例(千葉)があり、逆刺の深い形態で極めて観音山古墳に近いものであるが、城山1号墳のものには棘関がある。その後は、金鈴塚古墳例(千葉)の細身で逆刺を有する長三角形鍬で、二重逆刺のものがある。

④ セット関係からみた観音山古墳の

鉄鍬について

観音山古墳の個々の鍬について、県内の同類鍬の



第188図 群馬県内出土有頸長三角形・柳葉、有頸腸袂長三角形・腸袂柳葉鍬集成図

系統からその位置づけをおこなってきたが、ここでは、ほぼ同時期の主要古墳で大量の鉄鏃の出土をみた例をあげて、観音山古墳の鉄鏃との比較を主にセット関係からみてみたい。

比較する古墳の時期は6世紀後半と6世紀末～7世紀初頭にかけての2時期とし、地域は、近畿地方の大和地域と関東地方の上野地域及び総地域の3地域とする。

6世紀後半に比定される鏃出土の古墳例として大和地域では藤ノ木古墳例、上野地域では観音山古墳例、総地域では城山1号古墳例をあげた。6世紀末～7世紀初頭にかけての例としては大和地域では牧野古墳例、上野地域では観音塚古墳例、総地域では金鈴塚古墳例をあげた。

まず、6世紀後半に比定される鏃を3地域で比較してみたい。(第189・190図) 地域を越えて、時期的な特徴としてあげられることは、6世紀末～7世紀初頭の例に比べて、各古墳で所有する鏃の形式・類型の数が多くことである。藤ノ木古墳で4形式・7類型、観音山古墳で3形式・5類型、城山1号古墳例が一番形式・類型数ともに多く、8形式・14類型ある。それに対し、時期の少し下った6世紀末～7世紀初頭のそれぞれの地域の3例は、牧野古墳で3形式・3類型、観音塚古墳で4形式・4類型、金鈴塚古墳で3形式・8類型となる。いずれも、形式・類型ともに時期が下るにつれ減っている。これは、6世紀後半段階においては、鉄鏃にまだ多様な形態が残っていることを示しており、6世紀末に至り、ある程度の統一化が成し遂げられたことを示しているといえるだろう。

鏃のセットの関係では、盗掘の段階で遺物が少なくなっている観音塚古墳例を除き、いずれも実戦用の長頸鏃と儀礼用の広根鏃に区分されている。実際、長頸鏃は数量的にも広根系の鏃を圧倒する数量を有している。それぞれの比率を実戦用の長頸鏃に対する儀式用の広根鏃のパーセントで示すと、藤ノ木古墳で2.9%、牧野古墳例で2.4%、城山1号古墳例で3.8%、金鈴塚古墳で6.6%といずれも10%にも満た

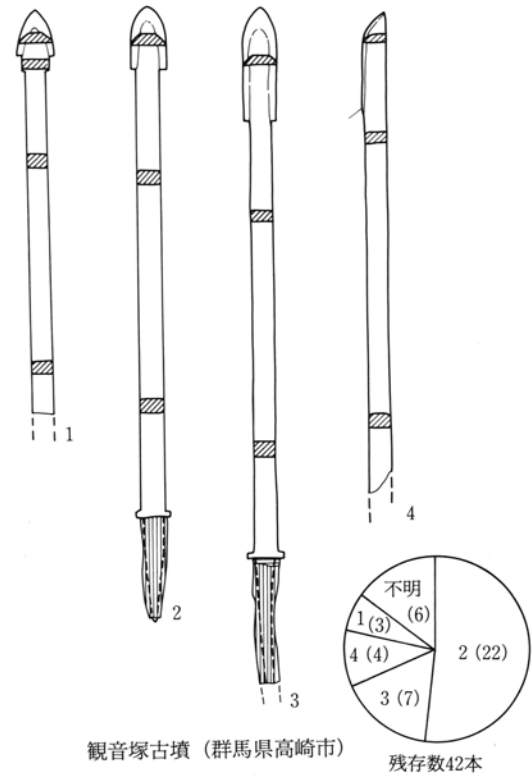
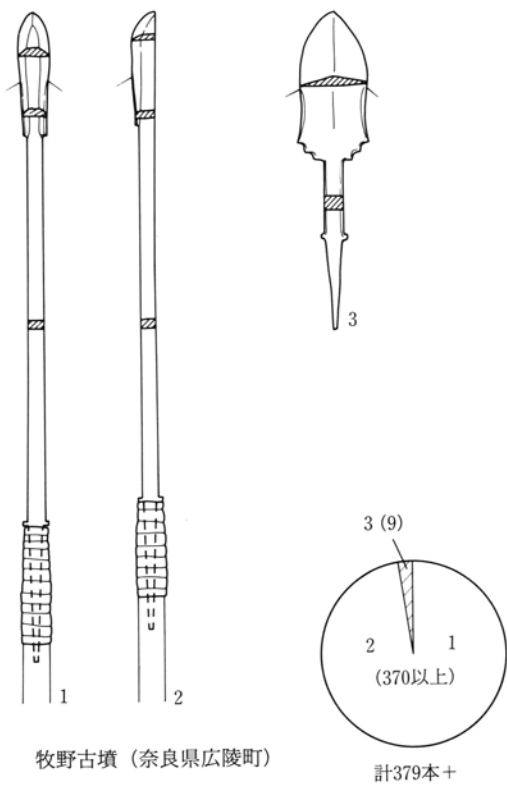
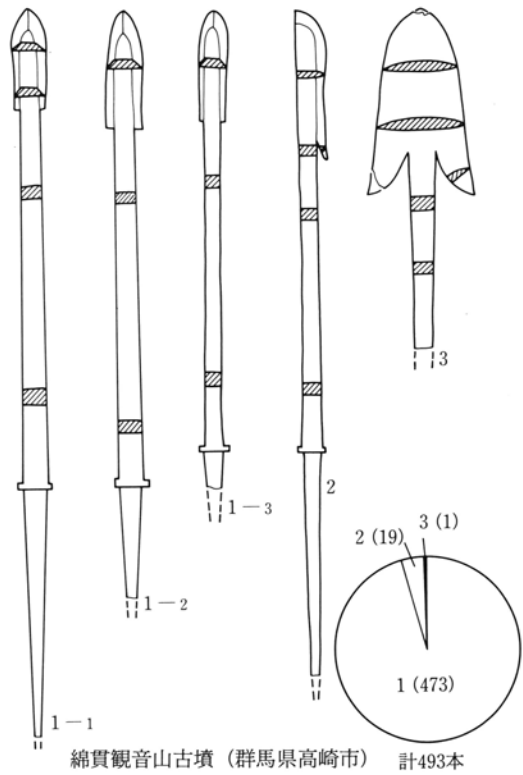
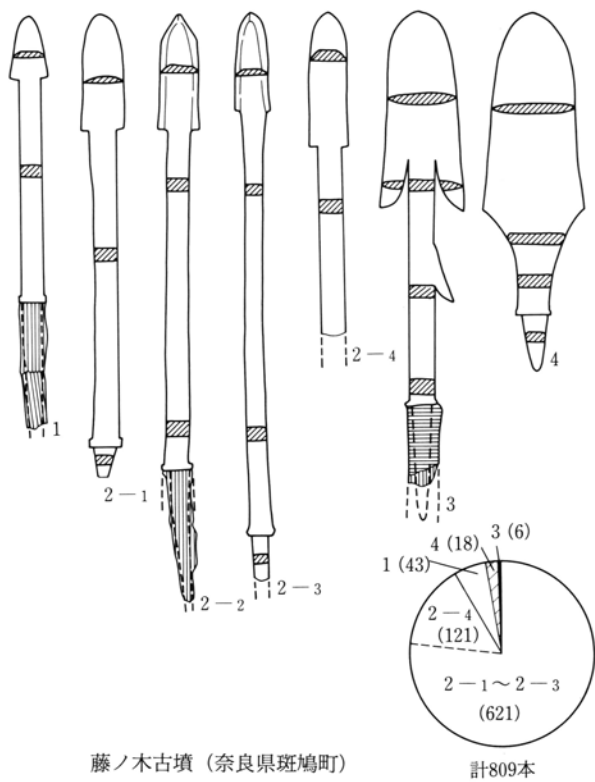
ない。特に典型的なのが、観音山古墳例で、すでに事実記載の所でも触れているが、総数492本の鏃の中にあつて広根鏃はたった1本で、比率にすると、0.2%である。5世紀後半段階頃を境にして実戦鏃と儀式鏃の区分が明瞭化する中で、6世紀後半のこの段階では、完全にセット確立したものと考えて良いだろう。本来、広根系の鏃が儀式用として副葬されたことを示すひとつの証拠となるであろう。

各形式を構成する鏃であるが、6世紀後半～7世紀初頭まで共通して、実戦用の長頸鏃は三角形鏃・柳葉鏃・片刃鏃の3形式にほぼ集約され、儀式用の広根鏃は腸袂柳葉鏃と柳葉鏃及び短茎長三角形鏃に集約される。

長頸鏃は6世紀後半の鏃をみると、いずれも刃が鏃身部全体にあり、片丸・片切刃造である。鏃身関も角関を中心とする明瞭な関であり、棘関である。それに対し6世紀末～7世紀初頭の鏃は、構成形式は同じだが、刃がだんだんと上部に集約されていく型式のものが中心で、鏃身関も斜関のものが多くなる。また、全体に細身となり、重量もやや軽くなる傾向がある。刃が片丸・片切刃造で、棘関を有することは同じである。

広根鏃は6世紀後半の鏃は腸袂柳葉鏃が中心で、このことは、藤ノ木、観音山、城山1号に共通の要素でもある。それが、6世紀末になると広根鏃が明瞭でなくなり、柳葉鏃や腸袂の長三角形鏃などが広根鏃として意識されて使用されている。

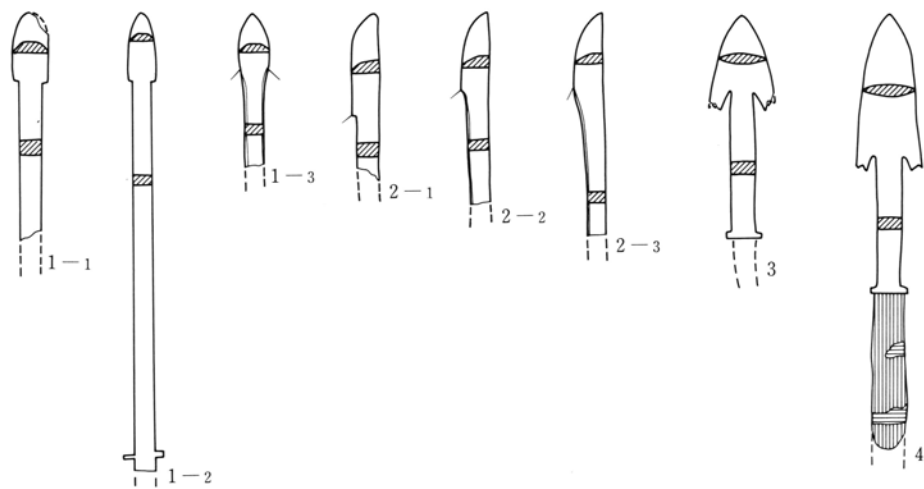
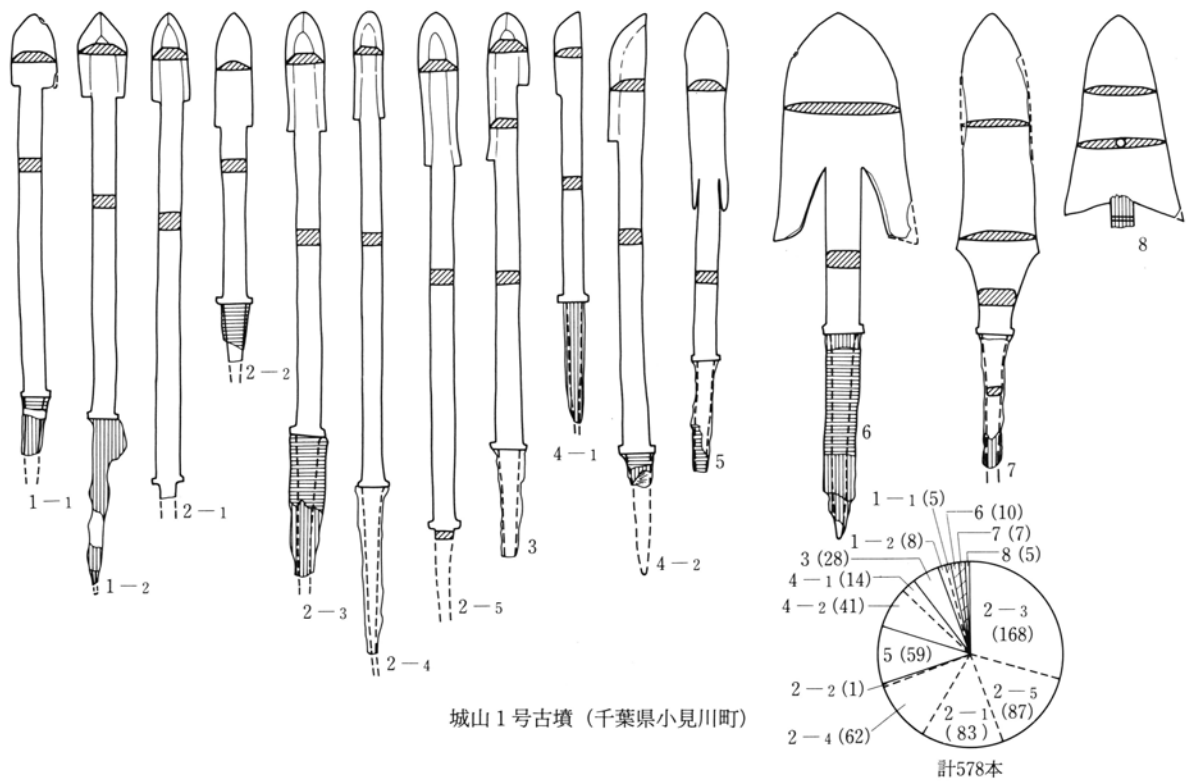
いずれにしても、観音山古墳例は、未盗掘の6世紀後半の大量埋納例の鉄鏃の典型例として重要である。特に、副葬品のセットでは、すでに後藤守一が正倉院御物矢の検討から五十隻一括として胡禄一具に盛られている場合には、一隻又は二隻が広根であり、他の四十八、九隻は尖根であるとして、中世以降の「上差の矢」との関連を指摘しているが、観音山古墳例はこのような、広根鏃が儀仗的な用途を持つものであることを示す良好な資料となるだろう。



広根鉄

0 5 cm

第189図 後期古墳出土鉄鏃例(1)



広根鍔

0 5 cm

第190図 後期古墳出土鉄鍔例(2)

2. 遺物に関する考察

参考文献

- 『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所
1990
- 『史跡 牧野古墳（広陵町文化財調査報告第一冊）1987 広陵町
教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所』
- 『群馬県史 資料編3 原始古代3 古墳』1981 群馬県史編さ
ん委員会
- 尾崎喜左雄・保坂三郎『上野国八幡観音塚古墳調査報告書』『群馬
県埋蔵文化財調査報告書』第一集 1963 群馬県教育委員会
- 『城山第1号前方後円墳』1978 小見川町教育委員会
- 『上総金鈴塚古墳』1952 早稲田大学考古学研究室
- 『中川原遺跡群上ノ山遺跡』1992 大胡町教育委員会
- 『少林山台遺跡』1993 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 『赤堀村地蔵山の古墳2』1978 赤堀村教育委員会
- 右島和夫『鶴山古墳出土遺物の基礎調査IV』『群馬県立歴史博物
館調査報告書』第5号 1989 群馬県立博物館
- 『奥原古墳群』1983 群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査
事業団
- 『中ノ峯古墳』子持村教育委員会
- 『富岡5号古墳』富岡市文化財調査報告第1冊 1972 富岡市教
育委員会
- 『前二子古墳』前橋市教育委員会
- 『上田篠遺跡』富岡市教育委員会
- 後藤守一『上野国佐波郡赤堀村今井茶白山古墳』1932 帝室博物
館学報6 帝室博物館
- 『川額軍原Ⅰ遺跡』1996 昭和村教育委員会
- 『宮城村誌』1973 宮城村誌編集委員会
- 『上ノ山遺跡』1992 大胡町教育委員会

挿図出典一覧

- 第186図 -1 『群馬県史』資料編3 古墳 よりトレース
-2 群馬大学にて実測
-3・8・9 『上ノ山遺跡』よりトレース
-4 『前二子古墳』よりトレース
-5・6 富岡市教育委員会にて実測
-10 高崎市観音塚考古資料館で実測
-11~13 群馬県埋蔵文化財調査事業団で実測
・20・21
-14~19 群馬県埋蔵文化財調査事業団で実測
-22 『上田篠遺跡』よりトレース
- 第187図 -1 『上野国佐波郡赤堀村今井茶白山古墳』よりトレー
ス
-2 群馬県立歴史博物館で実測
-3・4・8 『上ノ山遺跡』よりトレース
-5・6 『赤堀村地蔵山の古墳2』よりトレース
-9 高崎市観音塚考古資料館で実測
-10~18 群馬県埋蔵文化財調査事業団で実測
- 第188図 -1 群馬大学にて実測
-2・3 『中ノ峯古墳』より一部加筆トレース。子持村教育
委員会で実見。
-5 『上ノ山遺跡』よりトレース
-6 群馬県埋蔵文化財調査事業団で実測
-7 『川額軍原Ⅰ遺跡』よりトレース
-8 『宮城村誌』よりトレース
- 第189図 ① 『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』より一部修
正トレース
② 『史跡 牧野古墳』よりトレース
③ 高崎市観音塚考古資料館で実測
④ 小見川町教育委員会にて実測
⑤ 金鈴塚資料館で実測